

山菜類の増殖技術

1 はじめに

ここ数年、春先にはスーパーの店頭などにも多くの山菜類が見受けられるようになり、消費者の山菜類への関心も高まってきています。今後、山菜類の消費拡大、生産振興を図る上で、その増殖技術は重要となってくると考えられます。そこで今回は、当センターで試みた各種山菜類の増殖法などをご紹介します。

2 各種山菜類の増殖法

(1)クサソテツ (コゴミ)

長野県では「コゴミ」と呼ばれることが多い、シダ類の多年生草本植物です。春に沢筋や幾分湿気の多い半日陰地などに多く自生しており、春に姿を現す若芽を摘み取って利用します。同じシダ類のワラビなどと違って、アクが無いため食材としても人気が高い山菜です。増殖法としては、塊茎や塊茎

から伸びるランナー（ほふく枝）を利用した方法が一般的で、比較的容易に増殖できます。

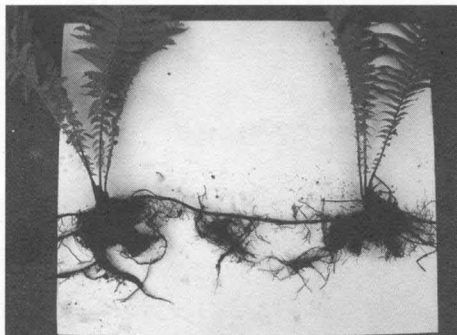


写真-1 2つの塊茎と塊茎間をつなぐランナー

まず、クサソテツの葉が枯れ落ちた晩秋以降に地面を掘り、塊茎やランナーを採取します。このため、夏の間にクサソテツの株の位置を確認しておく掘取り作業が楽になります。掘取った塊茎やランナーは早春の植え付けまで、コモなどで覆って温度の低い場所で乾燥や多湿にならないよう注意して保管します。当センターでは、3月中旬に掘り取り、すぐに山土を入れたプランター内に植え付けてみましたが、塊茎、ランナーとも増殖させることができました。

植え付けは、最初に塊茎とランナーを切り離して、塊茎はそのまま植え付けます。植え付け深さは、塊茎の上面が土壌表面から少々出る程度とします。

ランナーは長さ約7～8cmに切り分け、それぞれを深さ約3～5cmに植え付けます。

植え付け場所は、幾分湿気のある半日陰が良いようです。

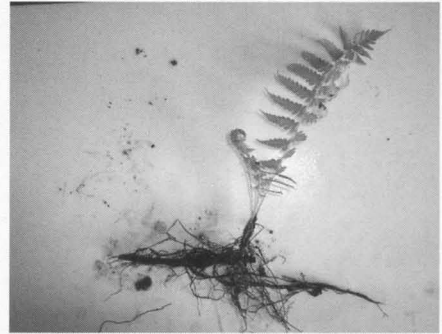


写真-2 植え付けたランナーから栄養葉が発生

植え付け場所は、幾分湿気のある半日陰が良いようです。

(2)フキ

キク科の多年草で独特の強い香りを持ち、主に葉柄と展開前の花茎であるフキノトウを利用します。増殖には通常、親株や地下茎を用います。これらの掘取りは、晩秋または早春に行います。掘取りの際には、親株や地下茎などを痛めないようにします。掘取った親株はそのまま植え付けます。

地下茎は、よく見ると節がありますので、節が一カ所以上入るようにして、長さ4～5cm程度に切り分けます。これを深さ2～3cm程度に植え込みます。栽培地は、肥沃な土壌で湿度の保てる半日陰地が良好のようです。

栽培地は、肥沃な土壌で湿度の保てる半日陰地が良好のようです。

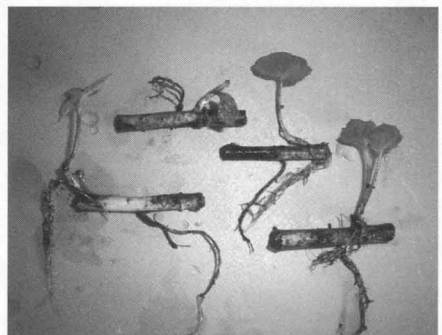


写真-3 地下茎からの発芽

他の増殖法として、文献などでは根から発生する不定芽による増殖も紹介されています。この方法は、根を2cm程度に切り分け、赤玉土やピートモスなど肥料分の少ない材料で用土を作り、そこに切り分けた根を並べ、根が隠れる程度に覆土して行うものです。

(3)タラノキ

タラノキはウコギ科の落葉低木で、主に春の若芽を摘んで、天ぷらなどに利用されます。「新駒」などいくつかの栽培品種もあり、促成栽培ものが1～2月にはスーパーなどの店頭でも見ることができます。

増殖法としては、根を植え付けて行う根挿し法が一般的です。この方法は、早春に根を傷付けな



写真-4 タラノキ根からの発芽

よう丁寧に掘り取り、根の直径が約5～6mm以上の太さの部分を長さ15cm程度に切り分け、これを植え付けるものです。植え付け深さは5cm程度とします。タラノキは陽樹ですので、栽培箇所は陽当たりのよいところで行います。

また、タラノキには「タラノキ立枯れ疫病」という病気があり、植え付ける根は必ず健全な根を使用するようにします。一旦この病気が侵入した栽培地では防除が難しいですので、事前に適切な農薬使用も検討することが大切です。

(4)モミジガサ

キク科の多年草で、フキに似た独特の香りがあります。春に出た若芽を摘み取り、おひたしなどでいただきます。自生地はスギ林など、幾分湿気が多く、夏季冷



写真-5 スギ林内のモミジガサ

涼でチラチラと木漏れ日が入る半日陰地です。

増殖法には実生法、株分け法、さし木法がありますが、ここではさし木による増殖法をご紹介します。

材料となるさし木材料を採取する時期は、草丈

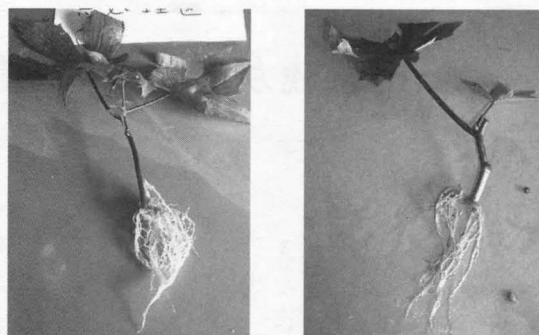


写真-6 天ざし（左）と葉芽ざしの発根状況

が30cm程度になる5月中旬から6月中旬くらいで、初夏の花芽分化前までが適期です。早朝や夕方など、なるべく日中の気温の上昇する時期を避け、モミジガサの地上部を切り取り、すぐに1時間程度水揚げを行います。水揚げ後、長さ15cm程度に切り分けます。こうすると1本の材料から、頂芽のあるさし穂1本と葉柄1～2枚程度付いたさし穂数本が得られます。頂芽のある部分を用いて行うさし木を天ざし、その下の葉柄のある部分で行うものを葉芽ざしなどと言います。これらのさし穂は蒸散を押さえるため、葉を半分に切ります。その後、茎の底部を斜めに切り、丁寧にさし床に植え付けます。なお、さし床の用土は鹿沼土が良いようです。

植え付けたさし床は、寒冷紗などで覆い、乾燥しないよう適宜散水して管理します。約1ヶ月ほどで発根が見られるようになります。

3 おわりに

山菜類は今回ご紹介したほかにも、ワラビ、ゼンマイなど比較的よく知られたものから、ギョウジャニンニクやオオバギボウシ、シオデなど多くの種類があります。これら山菜類は、里山の有効利用や荒廃農地の活用を図る上で、重要な品目となりうると考えられます。山菜増殖技術がキノコ類も含めた里山活用による特産林産の振興につながることを願っています。

(特産部 高木茂)

《参考文献》

- 阿部 清「新特産シリーズ クサソテツ」2003
 阿部 清「新特産シリーズ 野ブキ・フキノトウ」2004
 藤嶋 勇「新特産シリーズ タラノメ」1997
 吉岡 康隆「特産シリーズ モミジガサ」1986